

親日仏教と韓国社会

著者	申 昌浩
会議概要（会議名，開催地，会期，主催者等）	会議名：日文研フォーラム，開催地：国際交流基金京都支部，会期：2002年1月15日，主催者：国際日本文化研究センター
ページ	1-29
発行年	2003-01-31
その他の言語のタイトル	Pro-Japanese Buddhism and Korea society
シリーズ	日文研フォーラム ； 146
URL	http://doi.org/10.15055/00005673

第146回 日文研フォーラム



親日仏教と韓国社会

Pro-Japanese Buddhism and Korea Society



申 昌浩
SHIN Chang Ho

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公開を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 山折 哲雄

● テーマ ●

親日仏教と韓国社会

Pro-Japanese Buddhism and Korea Society

● 発表者 ●

申 昌浩
SHIN Chang Ho

国際日本文化研究センター 中核的研究機関研究員
Lecturer, Int'l Research Center for Japanese Studies



2002年1月15日 (火)

発表者紹介

申 昌浩

SHIN Chang Ho

国際日本文化研究センター 中核的研究機関研究員

Lecturer, Int'l Research Center for Japanese Studies

略歴

- 2000年 3 月 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了
- 2000年 3 月 総合研究大学院大学博士（学術）
- 2000年 4 月 就任（2003年 3 月迄）

著書・論文等

- ・「新たな年中行事としてのクリスマス」『京都精華大学紀要第15号』1998年
- ・「戦後日本と韓国におけるキリスト教とクリスマス」『京都精華大学紀要第16号』1999年
- ・「朝鮮総督たちの宗教政策」『佛教大学総合研究所紀要第7号』2000年

1. はじめに

皆さん、あけましておめでとうございます。

二〇〇二年、日本と韓国のあいだでは、これまでなかった多くのことが起こりそうな予感がします。もちろん、五月には日韓共催のワールドカップもありますが、そのほかにも何かと多忙な一年になりそうだなと思います。そういった予感からではありませんが、私は昨年の大晦日から元日にかけて、今年も良いことだけ起きますようにと、神様や仏様に頼みごとをするために初詣に行きました。大晦日の夜十一時五〇分ぐらいに一〇八の鐘をつくために、この近くにある新京極の「誓願寺」に行きました。誓願寺は落語家の祖といわれる安楽庵策伝上人のゆかりの地でして、多くの芸能者が芸道上達を祈願するために訪れる寺でありました。私も芸事が上達するように祈りました。私の場合は芸道上達というよりも、日本語がもっと上手くなりますようにとお願いをしました。それから、私はけっこう欲深い人間でして、同じ新京極の通りにある「錦天満神社」に行きました。錦天満神社は北野天満宮に縁を持つ神社でありますので、これからも学業が上達するようにと神頼みをして、家に帰ってきました。それからお昼過ぎには、家の

近くにあるお酒の神様を祀る「松尾大社」に行き、今年もおいしいお酒が沢山飲めますようにと、またお願いをいたしました。これらのすべてが、日本のお正月には欠かせない伝統的な風景であります。特に、私がおこなったすべての行為は、偽りのない宗教行為でもあります。

このような初詣はとなりの国、韓国では行われていない新年の行事でもあり、宗教行事でもあります。むしろ、韓国では寺や神社に行く代わりに、大晦日の夜から親戚が集まり、元日の朝、祖先に対する「茶礼」という礼拝を行うのです。これは、宗教的な祈りや儀礼であるというよりは、儒学の教えに基づいて長年行われている祖先に対する感謝の意を表す行事の一つであります。そうすると、やはり日本と韓国の宗教は大きく異なるのではなからうかといえます。その中でも特に、神社の存在が気になります。韓国には神をまつる神社が日本のような形ではありません。むしろ、朝鮮半島に住んでいる人々も神を信じていますが、こんなに多くの神社はありません。その代わりに、日本よりもはるかに多いのがキリスト教会です。もし、韓国に行く機会がありましたら、韓国の夜空（ソウルでもどこでもいいですが）を一度見上げてみてください。日本の夜空とは異なる風景が目の前に広がると思います。それは、韓国の夜空を彩採っている十字架、それも華やかなイルミネーションの十字架の数にびつくりすると思います。一九九八年

度の韓国プロテスタントとカトリックを合わせた教会の数は、六四、四二七ヶ所であり、キリストを信ずる信者の数は二三、五二七、六三五人にも上ります。国民の半分が教会に通っているクリスチャンであるということです。しかし、これらの統計は宗教団体が自ら申告した数によるものでありますので、それほど信憑性は高いと思います。それに比べ日本のキリスト教信者は、国民の１％弱にも満たないといわれています。そのことを考えると、いかに韓国に教会とキリスト教信者の数が多いのかが分かります。

しかし、韓国で一番長い歴史と伝統がある宗教は、仏教です。今現在韓国にある寺の数は、一八、五一ヶ所であり、その信者の数は、三〇、七六四、〇四五人にも上るのです。¹この韓国の仏教が、一時期日本の仏教の影響を受け、親日的な性格が強い宗教として批判されたことがあります。今は韓国の仏教を「親日仏教」であるという人は誰もいません。しかし、日本の植民地支配を受けた韓国仏教に親日仏教としての傷跡は未だ完全に消えていないように思われます。今日は、どうして韓国仏教が親日仏教といわれるようになったのか、韓国社会はどのように受け止めているかについて少しお話してみたいと思います。

まずそのために、朝鮮半島における「親日」²という問題を考えなければなりません。

「親日」という問題は、今日の韓国の政治・経済・文化のどの断面をみても様々な問題が未だに残っています。また、韓国人のナショナリズムをくすぐる気持ちの問題でもあります。日本の植民地支配から解放されてすでに五十年も経っているにもかかわらず、何一つ解決される兆しは見えてこない歴史的な傷跡なのではないでしょうか。日・韓両国のあいだで何かと不協和音が発生する度に必ず問題にし、両国の緊張感を高潮させる道具として利用されているように思われます。二〇〇二年日韓共同開催のワールドカップを迎え、こういった問題を解決するためにも、日韓両国のあいだに内在している問題は何かについてももう一度考えるべき時期に来ているのではないのでしょうか。

朝鮮半島の近代宗教形成の問題は、他の政治問題とほぼ同じくらい関係性があると思います。いわゆる、朝鮮王朝が封建的な君主国家から近代国家への扉を開いていく過程で形成された韓国的ナショナリズムと深い関わりを持っています。また、近代日本に対する「親日」と「反日」という民族的な感情問題も含まれております。そのため、今日においても慎重に扱わなければならない神経質な課題であります。今日のお話は、私が今もつとも関心を抱いている「日本と韓国の近代宗教形成史」の中から、再生宗教としての朝鮮仏教が持つ親日性についてであります。韓国における近代的な宗教形成史において、この「親日」や「反日」の問題は、これまでそれほど綿密に論じられてきた内容

であるとは思われないのです。朝鮮半島における近代の成立は、日本の近代と深く関わりをもっている日本研究の一つでもあります。

2. 朝鮮王朝の排仏政策と朝鮮仏教の特徴

朝鮮半島における仏教の始まりは、三七二年に高句麗の小獸林王（三七一—三八三）が、中国から伝来してきた仏像と仏典を受け入れたことによるといわれています。当時、高句麗が仏教を受け入れた目的は、古代国家として王室の權威を高め、民衆の精神的な統一を狙うことにあったと思われます。このように受け入れられた仏教は、伝来当初から国家の庇護下で大きく発展し、「鎮護・護国仏教」として定着するようになりました。仏教は、準国教時代の統一新羅を経て、国教として高麗時代の末に至るまで、文化を創出する主役としての地位にありました。仏教は、単なる宗教の範疇を超えた民族の精神を培ってきた文化の一つでもありました。そして、周辺諸国を始め、国際的な文化交流の担い手でもありました。このことから古くから日本とのあいだにおいても、この仏教が文化交流の担い手であったことはいままでもないと思います。朝鮮半島における仏教は伝来から一六〇〇年のあいだ、多くの王様や僧侶たちによって、そして民衆たちが力

を合わせて守ってきた伝統的な民族の宗教であります。

この伝統宗教仏教が高麗時代の末に至ると、政治的・経済的な不祥腐敗の温床になってしまったのです。腐敗した仏教に対する批判の声も次第に高まり、排仏政策を取るべきであるという世論も形成されるようになりました。特に、儒学を身につけ、科擧を通じて政治舞台に登場した一部の新進士大夫と、革新的な武士階級が排仏を強く要望するようになりました。そして彼らは、一三九二年に仏教王国高麗を倒し、朝鮮を建設したのであります。新たな国家朝鮮は、儒学思想を基盤とした両班官僚組織と政治体制を構築するものであります。彼らはすべての政治・経済体制を儒学思想に基づいた国家建設を目指しました。彼らの「排仏論」や「排仏政策」の原因は、高麗時代の仏教があまりにも国家の庇護を受けながら政治的、経済的に膨張していたことと、僧侶の地位が貴族化され、風紀を乱していたことが上げられると思います。そのため朝鮮の王様たちは、政治機構から仏教色を排除、撤廃し、儒学思想による「徳治主義」の理想政治を実現するために様々な排仏政策を行うことになりました。

朝鮮両班社会からの冷遇と中央政権から見放された僧侶たちは、社会的な地位が低下し、経済的にも零細化を逃れることはできなかつたのです。大部分の僧侶は、製紙などの手工業に従事することとなり、奴婢階層と何ら変わりのない身分の位置に置かれてし

まったのです。朝鮮仏教には、いつの間にか「護国仏教」としての色合いがうすくなっていました。その代わりに、僧侶たちの物貰い行為や寺の世俗的な信仰行為の傾向が益々強く現れるようになりました。その世俗的な信仰体系が一般庶民には受け入れられ、仏教を崇拜する伝統も相変わらず続いていたのです。

こういった朝鮮仏教の姿は、崇儒排仏を唱えていた為政者や男性から離れ、両班たちの家を守る役割を担っていた内房（婦人）によって、保全されることになったのです。女性たちによって、守られた仏教は、家族の成功や死後の祈願や病気を治すなどの行事を担当する役割をしたのです。僧侶たちも困難な寺院を維持するために、仏教行事の中に土俗的な信仰を習合させていたのです。本来の信仰形態から大きく逸脱した不健全な状態であったかも知れませんが、民衆レベルに根強く生き残る方法を選択したのです。排仏という嵐が吹き荒れた朝鮮時代においても、仏教は女性たちの信仰心によって生き残ることができました。朝鮮時代の仏教は、現世利益のために求福祈禱の形式ではあったが、宗教としての役割を十分果たしていたともいえます。

朝鮮時代の崇儒排仏政策によって、お寺や僧侶の姿は都城や村から消え、町から山中に追いやられたことによって、「山中仏教」もしくは「山僧仏教」ともいうようになりました。そして、信仰の対象者が男性から女性へ移行したことによって、「家内（内堂、

内房) 仏教」ともいうようになりました。この一連の宗教施策と宗教形態の変貌が、結局、朝鮮仏教を特徴づける要因になりました。国家による保護や仏教思想を重視していた時代とは異なり、朝鮮時代の仏教は、政治性が欠如している姿になりました。その代わりに、貴族の宗教から生活に密着した「民衆の宗教」として、「庶民の宗教」として定着したともいえると思います。

3. 開国と朝鮮仏教の再生

一八七六年二月二六日、朝鮮政府は「日朝修好条規(江華島条約)」を結ぶことで、長いあいだ堅く閉ざしていた鎖国の扉を開くようになりました。この規程付録によって、釜山港における「日人居留地租界条約」が調印され、後に、釜山が日本に開港されました。一八八〇年四月十二日に、元山に日本領事館が開館され、一八八三年九月三十日、仁川では「日本居留地借入約書」が、竹添進一郎と閔泳穆との間に調印され、使節の交換及び治外法権が認められるようになりました。この開港条約が成立したことによって、朝鮮内部では先進国日本と親密な関係をもつ親日的な性格の政治的集団が形成されました。また、それに対して敵対心を抱く反日的な政治勢力も形成されるようになりました。

（むろん、親清勢力も、親露勢力も、親米勢力なども現れていた時代でありました。）開港された港を中心に、多くの日本人が経済活動をするため進出してくるようになり、それに伴って日本の宗教界も、とりわけ仏教界が活発な宗教活動を行うようになりました。

一八八〇年代に伝来してきた日本仏教が行っていた布教活動に、朝鮮仏教界も大きな刺激を受けたことはいうまでもないことだと思いますが。しかしすでにお話したように、当時の朝鮮仏教は、排仏政策によって宗乗も宗旨も信条も曖昧な状況に堕ちていたのです。このことを念頭に置くと朝鮮仏教界が、いかに日本仏教界の活動に対してあこがれを持つようになったのかについては想像できると思います。むろん、先進的な行政機構の改革と西洋文物の受容に関して、朝鮮仏教界も大いに刺激を受けており、新たな自覚運動が始まる時期でもありました。こういった朝鮮仏教の動きが自力で軌道に乗る前に、日本仏教日蓮宗本佛寺住職佐野前勵（後に、日宗宗務統監に就任した）の登場によって、朝鮮仏教界の親日性が具体化されるようになりました。

日蓮宗の僧侶佐野前勵は、一八九五年三月三日、釜山に上陸した後、仁川を経てソウルに入り、日本公使館の後援を得て布教活動を始めた人物であります。佐野前勵は、当時摂政を行っていた大院君に謁見し、王室に接近するための法華経と香炉などをプレゼントし、「立正安国論及び古代綴錦」を献上したのです。それから同年四月二十二日に

総理、内務、外務、度支、学務、宮内の諸大臣を次々と歴訪し、「僧侶都城出入禁止」解除の上書を内閣総理大臣金弘集に提出しました。その建議書の内容は、朝鮮僧侶たちの都城出入禁止の不当性を指摘した上、この出入禁止に対する解禁を願うものであります。金弘集内閣は、その建議書を受け入れ、その年四月二十三日次官報に「僧侶の都城出入禁止令」を緩和させるという成果を挙げたのです。

これは一五〇三年、燕山君によって、僧侶たちにソウル四大門内の都城出入りを禁じていた、この「都城出入禁止」の解除および許可の快挙でもあったといえます。朝鮮仏教界の長年の夢であった都城出入が、日本からきた僧侶の力によって実現したのです。佐野前勵は、一躍にして朝鮮仏教界に再生のきっかけを与え、宗教活動の自由を吹き込んだ聖者になったのです。日本からの僧侶の意志によるものであったのか、それとも日本帝国政府の政治的な意図がどの程度働いたかは確かではありません。しかし、朝鮮僧侶たちの「都城出入禁止」が解かれたことは大きな意義があることには変わりのないことです。そして、長いあいだ足を踏み入れることを許されなかった都の城内で自由に弘法できることは、朝鮮仏教の新たな再出発と近代宗教への道を見出すようになったといえます。

都城出入禁止解除に対する朝鮮仏教界の反応の中には、佐野前勵に対する感謝の意を

積極的に表明した僧侶もありました。水原龍殊寺尚順崔就墟僧侶は、佐野前勵に感謝状を贈呈していたのです。また、北韓山中興寺住職李世益に日蓮宗を伝えた佐野前勵は、出入禁止令撤廃六日後に中興寺に「日蓮宗教会本部」の看板を掛けました。佐前勵野は、一八九六年に北一榮で、都城出入禁止を解除してくれた皇恩に報いるために、中興維新の大業を祝賀するという意味で高宗のために御安泰を祈る大祈禱祭をも開催しました。⁸この祈禱祭には、南・北漢山と金剛山及び華溪寺・白蓮寺・龍殊寺から来た僧侶三〇〇人と外務・学務・農商工部大臣以下高官二十名、日本の名士五十名など一五、〇〇〇名が参加した盛大な親日法会が行われました。⁹これを機に、日本仏教界の各宗派が日本人の保護と精神的な慰安機関としての役割を果たす目的を持つて、次々と朝鮮半島に各宗派の別院を建立し、宗教活動を行うための地盤を整え始めました。そして、日本仏教の活動範囲も、次第に朝鮮人を対象とするようになっていったのです。¹⁰佐野前勵による朝鮮仏教の解放は、日本帝国の朝鮮支配と仏教の布教の宗教侵略の基盤を形成する期となり、一八九七年に、朝鮮から大韓帝国に国号が変わる時期、僧侶の都城出入り禁止が完全に解かれるようになったのです。

4. 近代日本仏教の布教

十九世紀の末に入ると、日本帝国と朝鮮との政治関係が深く絡み合うことに歩調を合わせたかのように、日本仏教界と朝鮮仏教界との関係も深くなったことはすでに述べてきました。特に、日露戦争が勃発したことによって、日本仏教は朝鮮開教への転機を迎えることになりました。それも日露戦争が日本の勝利に終わり、朝鮮半島に対する利権を得た日本政府は、一九〇五年十一月に「第二次日韓協約」を締結しました。やがて一九〇六年二月に、漢城に韓国統監府を開庁するようになりました。これがいわゆる朝鮮半島における「統監政治」の実施を意味するものであり、統監府は、大韓帝国の外交権を始め、実質上の内政を干渉することで統監府による統治を始めたのです。そして、日本仏教各宗も朝鮮開教に対する意欲が一層高まり、すでに開教を実施していた諸宗は益々力を注ぐようになりました。未だ開教に着手していない真言宗・曹洞宗等も一斉に朝鮮布教に着手することとなりました。¹¹これらの各宗派も、日本政府の協力と援助により、急進的な成長を成し遂げるようになりました。日本仏教界を代表する本願寺が一九〇六年十月に、ソウルの龍山に「開教総監部」を設置したことで、¹²日本仏教の宗教的な進出の本格的な基盤を形成したのです。韓国仏教界は、近代的な日本仏教界の政治的、

経済的な力を見せつけられることになりました。

この「第二次日韓協約（乙巳保護条約）」が締結されると、全国各地で反日的な性格の義兵運動が、次々と発生しました。「乙巳保護条約」に反対する義兵たちと日本軍が衝突する事態が頻繁になりました。それに追い打ちを掛けるように一九〇七年に韓国軍隊が解散されると、武装解除された韓国軍が抗日義兵運動に参戦することによって、戦いが益々激しくなっていったのです。近代的な武器で武装した日本軍に劣勢であった多くの義兵たちは、山中の寺院を根拠地とし、抗日運動を展開するようになりました。そのため山中の寺院は、戦場化し、日々荒廃するようになったのです。このことを好機に、統監府は、朝鮮仏教を保護推進する計画を打ち出しました。その際、相当数の朝鮮の寺刹が、日本仏教の各宗派の末寺として隷属することで戦火を逃れようとしたのです。¹³

そして、統監府は宗教を規制するために、一九〇六年十一月十七日に統監府令第四十五号として、「宗教の宣布に関する規則」を發布しました。日本帝国が植民地統治を行うための宗教に関する政策とその関連法案の整備は、すでに統監府時代から始まったのです。この「宗教の宣布に関する規則」は、すべての宗教活動に関する認可や不認可を統監府令によって規定するものでありました。その時、宗教活動の認可対象となったのが、日本神道、仏教、その他の宗教に限られました。その他の宗教という曖昧な枠の中

身は、主に外国からの宣教師が布教活動を行っていたキリスト教のことでありました。それ以外の宗教、いわゆる韓国の自生・新興宗教及び民間宗教は、宗教としての認可対象にならなかつたのです。いずれにせよ、この「宗教の宣布に関する規則」によって、日本帝国から朝鮮半島における布教活動に対する許可権を獲得しなければならなかつたのです。この規則は建前上において日本の宗教であれ、外国の宗教であれ、その宗教活動が反国家的であると認められれば、朝鮮半島内での布教活動は許可しないことも可能であるということでありました。

さらに、一九〇七年七月に統監府は、宗教活動そのものを統制するために「保安法」を制定し、公布施行したのです。この法案は、韓国人だけにその効力がある法案でありました。この保安法を用いて統監府は、韓国の宗教教団を一般社会結社として扱つたので、その活動をきわめて制限するものでありました。日本は植民地支配を行う中で、日本が望む秩序の安定とその方向性のため、一般結社のような宗教の活動は固く制限、禁止され、治安維持の名目で警察の手によって、管理されることになりました。

一九一〇年、「日韓併合」が成立するまで展開された日本仏教界の活発な布教活動は、開港地と租借地が増えるにつれ、宗教活動の拠点も増していきました。日本仏教の代表的な六つの宗派は、ソウルを初め全国二十六地域で布教活動を行っておりました。その

各宗派が設置した寺院及び布教所の数も一八〇ヶ所に上りました。日蓮宗は、朝鮮内に十一ヶ所の寺刹を保有しており、真宗派本願寺は、二〇ヶ所の布教所及び出張所を保有し、附属事業として十個の教育機関と青年会を運営していました。曹洞宗は五ヶ所の寺刹と四ヶ所の布教所を、真言宗は、一ヶ所の寺刹と二ヶ所の布教所を設けており、浄土宗は、二〇ヶ所の寺刹及び出張所を運営していました。また、朝鮮人に布教するために四ヶ所の出張説教所を設置し、活動を行っていたのです。¹⁴ 浄土宗の開教監督には、白石堯海、堀尾貫務、廣安眞隨などが継承し、着実に教勢を拡大していました。浄土宗の布教活動によるその成果は、一九一〇年の浄土宗に所属していた朝鮮人の信徒数、五、三四三名であつたのが、一九三七年には、九五、〇五二名に昇る教勢を形成していました。浄土宗は、朝鮮半島で布教活動を行っていた他の仏教教団と比べ、信徒の数がもつとも多かつた宗派でありました。浄土宗はその勢いをもつて、朝鮮人による寺院と朝鮮人の教役者まで養成しようとした¹⁵。韓国仏教界と僧侶たちは、日本の仏教に親しみをもっており、開港後の日本の近代仏教の流入という外部的条件に便乗し、朝鮮仏教界の再起と再生を図っていたためであるといえます。

5. 植民地統治と朝鮮仏教の日本仏教化

朝鮮総督府は「日韓併合」の翌年である一九一一年六月三日に、朝鮮総督府制令第七号「寺刹令」を制定し、「朝鮮総督府官報第二二七号」に掲載・発布しました。この「寺刹令」は、韓国仏教界に対する懷柔と弾圧という両面性をもつものであるといえます。朝鮮総督府はこの「寺刹令」を利用し、韓国仏教界を日本仏教に附属させ、統治しようとする目的があったと思います。この「寺刹令」を通じて、朝鮮半島全国山地に散在している寺刹の運営を効果的に統制しようとしたものでした。そして、同年七月八日に続いて、朝鮮総督府令第八四号「寺刹令実施規則」八ヶ条をも発布しました。この規則によって、朝鮮の寺刹を三十本山（一九二四年に華嚴寺を加えて三十一本山となる）に統併合し、住職を朝鮮総督の統制下においたのです。総督府は、朝鮮仏教界を三〇個の教区域に分割させる方策をとったのです。¹⁶「寺刹令及び同令施行規則」は、朝鮮仏教を構造的に総督府の支配下におき、日本仏教に隷属させるための法案でありました。

この「寺刹令」の内容は、第一に、朝鮮仏教の宗派を統一して禪教両宗としました。第二、寺刹財産の安全を図ったのです。第三、寺刹の本末の関係を附し、統轄を図りました。第四、寺法を定めて法網の振肅寺務の刷新を図ったという意義を唱えるものでし

た。¹⁷ この「寺刹令」の制定と、その趣旨に関する説明では、千余年の歴史を有している朝鮮の寺刹の頽廃を防ぎ、仏法を保護更生することにあると述べていたのです。「寺刹令」によって、当時全国にあった一、三〇〇の寺刹と、七、〇〇〇名の比丘僧が総督府の統率下におかれることになりました。¹⁸ 韓国仏教界の多数の人たちが、この「寺刹令」を擁護する立場で現実を認識していたようであります。総督府の仏教政策に従うことが、
「国民の義務であり、仏教者として修業のためにも当然である」という見解も多く現れていたのです。「寺刹令」に対する朝鮮仏教の各寺刹の反応は、とても良かったといえるものであります。¹⁹ 当時の仏教界が「寺刹令」によって、すべての活動と組織が正常化されたということについて各界からの極讃もありました。「寺刹令」を喜んだのは韓国仏教界の認識のなかに、韓国の仏教界が近代的に組織化されるということに注目し、そこに大きな意義を置いたためであります。また、僧侶たちの身分が社会的に安定され、寺刹の財産が保護されることに大きな満足を示していたといえます。²⁰

朝鮮総督府の宗教政策は、施政以来終始一貫して、朝鮮仏教の保護善導に努めたという建前の下で、一九三七年二月に併合以来最初の試みとして、「三一本山住職会議」を開催しました。この「三一本山住職会議」が動機となり、朝鮮僧侶の覚醒を促すという名目で有力な住職らは様々な画策を試みるようになりました。それが「帯妻制度」であ

ります。一九一一年、総督府が發布した「寺刹令」には、「各本山の寺法制定する際にも比丘に限って、本末寺の住職とする規定」²¹となっていました。しかし、朝鮮仏教界は日本仏教のように僧侶の結婚、いわゆる帯妻を制度的に保証する条文を盛り込ませたのです。朝鮮仏教に「帯妻制度」を取り入れたのであります。このことは、暗黙のうちに進めていた日本仏教化を公然と行おうとする意志を表明したものであると思われます。

近代日本仏教の特徴である「帯妻制度」を朝鮮仏教界にも導入させ、そうすることで、日本仏教と同一なものである認識を朝鮮の僧侶たちに植え付けようとしたのです。²³この「帯妻制度」は、日本仏教界に一八七二年に出された「太政官布告第三百三十三号」によって、公布されました。その内容を見ると、「自今僧侶肉食妻帯蓄髪等可為勝手事 但法用ノ外ハ人民一般ノ服ヲ着用不苦候事」²⁴となっていました。この太政官の布告をそのまま韓国仏教界にも取り入れたのであります。この「帯妻制度」が、公然と朝鮮仏教界に広まることによって、比丘を中心としていた朝鮮仏教の特色を²⁵薄め、より日本仏教界の形態に近いものにしたような政策であったと思われるます。この「帯妻制度」が、解放後の韓国仏教界においてもとても大きな親日問題として残るのです。

特に、韓国仏教界の中堅僧侶として積極的に活躍していた留学僧たちは、帰国後彼等はおおむね結婚をただけでなく還俗もしていたのです。²⁶彼等は公費または、私費留学

で日本に渡り、日本の仏教を学んできた僧侶であり、その数は、六〇〇人を上回るといわれています。彼等の言い分は、〃日本の僧侶は妻子がいるにも関わらず日本の社会から尊敬されている〃と述べているのであります。日本仏教の一断面を見た韓国の留学僧侶たちに、伝統的な朝鮮仏教の持戒に対する価値観に変化をもたらしたといえます。²⁷このように帯妻制に対しては、国内の多くの仏教者たちも賛成しており、親日的な傾向もさらにつよく現れてくるのであります。僧侶たちは、日本の女性や両班家門出身の女性を娶ることによって、その社会に進出し、朝鮮時代に抑圧されてきた政治的、社会的な地位や権限を取り戻そうとしたのです。

6. 解放の喜びと悲しみの親日仏教

一九四五年八月十五日、連合軍の勝利によって、朝鮮半島は日本帝国の植民地から解放されることになりました。それは政治的な解放だけでなく、経済的・文化的にも解放されたのです。仏教も他宗教と同様に日本の植民地支配からやっと解放されることになりました。植民地からの解放は、韓国仏教に宗教として自由と独立の喜びをもたらしただけでなく、韓国仏教界に混乱と親日というレッテルをも同時にもたらしたのです。解

放後の韓国仏教界の宗権を握っていたのが、解放以前と同様に帶妻僧でありました。彼等は日本の植民地時代にも権力の座に就いていた親日宗教家といわれていた人々でありました。彼らの政治活動が、韓国仏教界に内在していた「親日の問題」を表面化させたのです。

解放後、韓国仏教界を始め、各宗教界の最も大きな問題点であった日本帝国への協力と、協力の見返りとしての財産を蓄積した親日者に対する処分が問題となりました。特に韓国仏教界において、日本の植民地支配に便乗し、一般の民衆が苦しむとき「帶妻肉喰」を行いながら、華やかな生活を送っていた親日僧侶が何よりも大きな問題になりました。勿論、これらの問題は、仏教界だけの問題と言うよりも、社会全体に内在していた「親日」や「親日派」の処理問題でなければならなかったのです。新国家建設の基本的な前提は、日本帝国による植民地時代の残骸を削除し、「親日」及び「親日派」の処理が問題でありました。しかし、解放後の韓国仏教界内部は、親日的な要素の削除に足を捉えられ、教団の浄化という時代的な要求に応えることができず、そのまま生き残っていたのです。

一九四五年、韓国仏教界の帶妻僧の数は七、〇〇〇名でありましたが、それに対して、伝統的な韓国仏教を主張した比丘僧の数は、わずか五〇〇余名に過ぎなかったのです。

これは帶妻僧の数が、比丘僧の十四倍をも上回るものでありました。²⁸これは解放後の韓国仏教界において、その実権を掌握していたのが、帶妻僧侶たちであったことを証明する証であったといえます。彼等は、植民地支配の協力者としての反省も行わずに、解放後も経済的、政治的基盤を守るための政治活動を行い続けていたのであります。

今日、韓国の寺刹や寺院の数は、約一八、五一一にも上る数があるといわれております。²⁹その殆どの僧侶たちは「帶妻肉喰」をしない比丘及び比丘尼という清僧と尼僧に変わっているのです。³⁰いわゆる、伝統的な韓国の仏教本来の姿と、清浄比丘による宗教活動に戻っていることを意味するように思います。しかし、今日のような伝統的な仏教の姿へ戻る過程には、様々な苦境が待ち構えていたのです。アメリカ軍政は韓国仏教界を統制するための法律的な根拠として、日本植民地時代下で制定された「寺刹令」と「朝鮮仏教曹溪宗総本山○○及び三十一本寺・末寺法」をそのまま存続させていたのです。³¹そして、一九四九年六月に公布された「農地改革法」は、土地収入に依存していた仏教宗団に大きな打撃を与えたのです。土地収入が経済的な基盤であった仏教宗団は、再び自立のための経済基盤を失うことになったのです。³²韓国仏教教団は解放直後、自らの民族的覚醒と宗教的良心による教団浄化の意志が、政治的な混乱と民族間の戦争によって、中断されることになりました。また、韓国仏教界は朝鮮戦争による被害が整理される前

に、旧日本寺院と個人の所有になっていた多くの寺刹財産が、キリスト教団体や個人に売却されるなどの損失を受けたのです。

そして、朝鮮戦争が一九五〇年六月二十五日勃発し、一九五三年休戦が成立するまで、同族間の激しい戦争によって、国土は荒果ててしまいました。その翌年である一九五四年五月に、李承晩大統領は「仏教浄化に関する諭示」³³を發表したのです。この「仏教浄化に関する諭示」は、一九五五年までのあいだ、七回も發表されたのです。大統領の仏教浄化という名分の諭示は、当時七千名の帶妻僧侶と、³⁴五百名余りの比丘の間に仏教紛争を招来し、帶妻僧と比丘僧とのあいだでは政治的な争いが始まったのです。その第一次諭示の内容は、『過去四十年のあいだ、日本人たちは所謂神道というものをもつてきた。自分たちの天皇を天神のように崇める制度を作り、神社参拝を行うとき宣教師は参拝を拒否し、韓国から追放された人もおり、被迫された人もいる。我々韓人教徒たちも神社参拝を拒否して獄中で被迫された人の数も多く、死んだ人もいる。同時に日本人たちは所謂仏教というものを韓国に伝播させて、我々の仏教で行わないすべてのことを行い寺刹を都市と村落に混ぜ、僧侶に家庭を持たせ俗人たちと一緒にいさせた。(中略)韓国の高尚な仏道を抹殺させようとした。その結果、今日の僧侶は、僧であるか俗人であるか混沌している。そのため我々の国の仏教というものは有名無実になっている。³⁵“こうい

た内容でありました。これらの諭示に基づいて第三次の諭示では、「仏教浄化委員会」が設立されました。また、一九五五年二月四日に「韓国仏教浄化対策委員会」を構成し、仏教浄化の基本問題に対する公開討議が行われました。その後、文教部長官の報告書という形をもって、寺刹浄化に関する仏教教団内の両院（総務院側と禪学院側）の合意の下で、僧侶の資格に関する「八大原則」³⁶をも決めました。こういった原則を始め、大統領の仏教浄化に関する諭示は、日本帝国から解放後成立した大韓民国が民主国家として掲げていた政教分離の原則に反していたといえます。これはいわゆる、政府権力による新たな宗教弾圧の一場面であったとも考えられます。

当時、国家運営に携わっていたアメリカ軍政には、李大統領の政治的な意図が大いに含まれていました。一種のキリスト教指向の宗教政策であったともいえます。アメリカ軍政は仏教が韓国民衆の伝統的な民族宗教であり、民衆を巻き込む政治的な力を得ることに對して不安を抱いていたのです。アメリカ軍が軍政を行うに当たって、戦略に韓国仏教界の政治的、経済的な弱体化の必要性を唱えていたといえます。敬虔なキリスト教徒であった李承晩大統領との宗教的な対立も、大きく関わりを持っていたと思われます。政界に進出していた仏教系政治家（特に帶妻僧）³⁷に対する政治的な牽制であり、政治的な計算が含まれていたといえます。しかし、李承晩大統領が行った仏教浄化政策がまた

らした影響を始め、親日仏教としての性格が、今日の韓国仏教界に未だに残存しているのです。

7. おわりに

私は「近くて遠い国」という言い方や、「近くて近い国になろう」という言い方も嫌いです。日本と韓国は「隣人」や「隣国」ではなく、となりの友だちになるべきではなからうかと思っています。友たち同士では、喧嘩もするけれども、互いの痛みを共有できる家族以外の唯一の存在であります。

今日は、「親日」「反日」の話を近代期に向かい再生された朝鮮仏教にもたらされている「親日性」についてお話ししました。「親日」という言葉や「反日」という言葉は、あまりにも日本と韓国の人的・物的交流を妨げる壁のように感じます。

今、私は友だちになろうという話をしましたが、ハンゲルで友だちは「친구(チング)」といいます。친구(チング)という字を漢字で書きますと「親しくて古い」と書きます。この親しくて古い 친구(チング)という文字をよく頭に浮かべ考えて見ると、これまで幾度ともなく話していた「親日」という文字のあいだに縦の線を一本書き入れれば、

「親旧（チング・친구）」となるのです。これからも日本と韓国は友人として、いわゆるチングとして一緒に歩く運命です。ですから隣の友人を知るための努力をしてくださるようお願い申し上げます。

ご清聴ありがとうございました。

注

- 1 一九九九年、韓国文化観光部が出版した『韓国宗教現状』による。
- 2 親日とは、
今日韓国で使用されている「親日・親日派」という用語は、一般的にどの時代においても見ることのできる「外勢との親縁性」をもっている意味とは大きくかけ離れているものである。親日・親日派には、政治集団という意味よりも民族的情緒ではどうしても許すことのできない反民族的行為をした売国奴・民族反逆者の概念として用いられている。こういった社会的言語の概念形成には、必ず歴史的過程を経るのである。現在韓国で用いられている「親日・親日派」の概念には、歴史的に過酷な経験を強いられた日帝三十六年間の植民地支配を背景にしている。
- 3 奥平武彦「朝鮮の條約港と居留地」『朝鮮開国交渉始末』刀江書院 1969 pp. 16—18
- 4 奥平武彦「朝鮮の條約港と居留地」『朝鮮開国交渉始末』刀江書院 1969 pp. 81
- 5 朝鮮仏教社の記者が掲載した。「韓僧入城解禁と日蓮宗の佐野前勸老師」『朝鮮仏教』二月号

第二十四号、朝鮮仏教社 1917 pp. 7

6 高橋亨『李朝仏教』1928 pp. 893—899を参照

7 高橋亨『李朝仏教』寶文館昭和四年 pp. 897—898

大朝鮮國水原花山龍珠寺僧釋尚順勤拝賀于

大日本大尊師閣下。吾道在本國至賤至卑不入京市今為五百餘年。

恒所蕭鬱。何辛交隣成章大尊師閣下濡此萬之外普施慈悲大恩

使本國僧徒快伸五百年來冤屈。始時今日獲賭王京。此實一邦僧

徒所共感賀。今於入城拝于

大尊師閣下。

乙未四月二十九日

8 강도노「韓國基督教은 民族主義的이었는가」『歷史批評』季刊二十七号、歷史批評社 1994

pp. 320

9 임종호『實錄親日派』돌베게出版 1991 pp. 26—27参照

10 金敬執 1998 pp. 128

11 源弘之「近代朝鮮仏教の「断面」とくに朝鮮開教を中心に」『龍谷教学』9

龍谷教学會議 1974 pp. 100

12 林慧峰『親日仏教論』(上) 民族社 1993 pp. 70

13 民族佛教研究所『韓國佛教宗団組織実態調査報告書』民族文化社 1989 pp. 37

14 金敬執 1998 pp. 141

- 15 임흥환 1991 pp. 24
- 16 金義煥 1985 pp. 182
- 17 朝鮮總督府總督官房文書課編 武部欽一「寺刹令の發布と其の運用に就て」『朝鮮』昭和六年五月号、朝鮮總督府 1931 pp. 3—8 参照
- 18 金任圭・張俊植共著『韓國民族文化引意識』正訓出版社 1997 pp. 406—407 参照
- 19 西慶秀『仏教哲学税 韓國的展開』佛光出版 1990 pp. 291
- 20 金光植『韓國近代仏教史研究』民族社 1996 pp. 42—43
- 21 金得槐『韓國宗教史』大地文化社 1989 pp. 270
- 22 韓國仏教界では妻を娶っている僧侶を帶妻僧という。
- 23 民族佛教研究所『韓國佛教宗団組織實態調査報告書』民族文化社 1989 pp. 46
- 24 中濃教徳『天皇制国家と植民地伝道』国書刊行会 1976 pp. 195
- 25 韓國の僧侶は、出家した後は世俗との縁を断ち、父母兄弟とも交流をしないことを美德とする傾向が強い。僧侶は「肉食妻帯蓄髮」しない聖なる存在として一般社会とは全く別の世界にいると見ている。
- 26 임혜봉『한권으로 보는 불교사 100 장면』가람기획 1994 pp. 384
- 27 朴敬勛「近世仏教税研究」『近代韓國仏教史』民族社 1992 pp. 49
- 28 김종명『仏教의 実相과 歴史』新亜出版社 1996 pp. 227
- 29 韓國宗教社会研究所『韓國宗教年鑑』一九九五年度版、고려한글문화사 1995 pp. 312
- 30 愛宕顯昌『韓國仏教史』山喜房佛書林 1982 pp. 66

- 31 동국대학교 석림동문회編 『한도불교현대사』 시공사 1997 pp. 20
- 32 曹溪宗總務院編 『韓國佛教淨化運動稅起源과 経緯 및 現狀』 曹溪宗總務院1957 pp. 6
- 33 朴敬勛 「近世仏教稅研究」 『近代韓國仏教史』 民族社 1992 pp. 48
- 34 当時、既得權を持っている寺の数は、一〇〇〇余りであったが、その中帶妻僧侶が占領していた寺が九〇〇余ヶ所であった。
- 35 曹溪宗總務院編 『仏教訴訟事件參考資料集』 曹溪宗總務院1957 pp. 10
- 36 その八大原則は、(1) 独身、(2) 修道、(3) 不洒草肉（お酒、たばこ、肉を食べない者）、(4) 削髮染衣、(5) 不犯四波羅夷（不殺生、不偷盜、不邪淫、不暴言を守る者）、(6) 三以上団体修道生活、(7) 非不具者、(8) 二十歳以上者（比丘戒受持者）以上の原則に該当する者、そして二十五歳以上になった者が住職になれると明記した。【大韓佛教曹溪宗編 『韓國佛教淨化稅 鬭爭経緯書』 曹溪宗總務院 1957 pp. 32】
- 37 民族佛教研究所 『韓國佛教宗団組織実態調査報告書』 民族文化社 1989 pp. 50

発表を終えて

第146回日文研フォーラムが行われた1月15日は、足場の悪い日にもかかわらず大勢の来聴者が集まってくれました。なによりも、信濃の国からも친구(親旧・古い友人)が来てくれたことはとても嬉しいことでありました。この日は、例年なら「成人の日」という「国民の祝日」であるはずでありました。その「成人の日」が制定されたのは、いまから、53年前の1948年7月であります。二十歳になった若者を成人として認め、これから責任のある大人として、社会の一員としての自覚をもつことを記念すべき日であります。その「成人の日」が2000年から祝日に関連する法案が改正され、1月の第2月曜日になったのです。

私は日文研フォーラムが行われた2002年1月15日を私だけの「成人の日」として位置づけたいのです。そういえば、韓国には日本で行われているような成人式や祝日としての「成人の日」はありません。そのため私は成人式をしたことがないのです。私はその成人式を遅れながら一般の来聴者と友人たちの前で研究者としての「成人式」を行ったと思っています。この成人式において、日本に来てから10数年を超える留学生生活に終止符を打つ、その代わりに、韓国の近代宗教と日本の近代宗教を比較する研究者として紹介されました。恥ずかしながらも私の成人式は、ひよこの研究者として、今まで私が行ってきた研究成果の一部を発表する形で行われました。今思うに、フォーラムという成人式で、何かを伝えることがいかに難しいものであるかを改めて学ぶことになりました。

この日文研フォーラムをもって、私は一人前の研究者であることの自覚と、責任がある社会の一員であることを体験しました。本当に貴重な経験をさせていただいたと思います。そして、これからは“研究者ですよ、と名乗ってもいいかな”と思うようにもなりました。こういった研究者としての「成人式」を与えてくれた日文研に感謝しなければなりません。またその場において、わたしの成人式の後見人として、これまで指導をしてくださった園田英弘先生が、私の発表にコメントをしてくださいました。そのことについてもこの機会を通じて感謝の意を表します。

申 昌 浩

日文研フォーラム開催一覧

回	年 月 日	発 表 者・テ ー マ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ Alessandro VALOTA (ピサ大学助教授) 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11	エンゲルベルト・ヨリッセン Engelbert JORI β EN (日文研客員助教授) 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン Lee A. THOMPSON (大阪大学助手) 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19	フォスコ・マライニ Fosco MARAINI (日文研客員教授) 「庭園に見る東西文明のちがいがい」
⑤	63. 6.14	SONG Whi Chil 宋 曩七 (慶北大学校師範大学副教授) 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9	セップ・リンハルト Sepp LINHART (ウィーン大学教授) 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11	スーザン J. ネイピア Susan J. NAPIER (テキサス大学助教授) 「近代日本小説における女性像—現実と幻想」
⑧	63.12.13	ジェームズ C. ドビンス James C. DOBBINS (オベリン大学助教授) 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡」
⑨	元. 2.14 (1989)	YAN An Sheng 嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11	LIU Jingwen 劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9	スザンヌ・ゲイ Suzanne GAY (オベリン大学助教授) 「中世京都における土倉酒屋—都市社会の自由とその限界—」
⑫	元. 6.13	HSIA Gang 夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) 「インタビュー・ノンフィクションの可能性—猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛かりに—」

⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント Ernst LOKOWANDT (東洋大学助教授) 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8	キム・レーホ KIM Rekho (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12	ハルトムート・O. ローターモント Hartmut O. ROTERMUND (フランス国立高等研究院教授) 「江戸末期における疫病神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3	WANG Xiang-rong 汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14	ジェフリー・ブロードベント Jeffrey BROADBENT (ミネソタ大学助教授) 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」
⑱	元.12.12	エリック・セズレ Eric SEIZELET (フランス国立科学研究所助教授) 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ Sumie JONES (インディアナ大学準教授) 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13	カール・ベッカー Carl BECKER (筑波大学哲学思想学系外国人教師) 「往生—日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10	グラント・K. グッドマン Grant K. GOODMAN (カンザス大学教授・日文研客員教授) 「忘れられた兵士—戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8	イアン・ヒデオ・リービ Ian Hideo LEVY (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12	リヴィア・モネ Livia MONNET (ミネソタ州立大学助教授) 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10	Li Guodong 李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇—文化伝統からの一考察—」
㉓	2. 9.11	MA Xing-guo 馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) 「正月の風俗—中国と日本」
㉔	2.10. 9	ケネス・クラフト Kenneth KRAFT (リーハイ大学助教授) 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ Ahmed M. FATTHY (カイロ大学講師) 「義経文学とエジプトのペーパルス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ Karel FIALA (カレル大学日文学科長・日文研客員助教授) 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12	アレクサンドル A. ドーリン Aleksandr A. DOLIN (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) 「ソビエットの日本文学翻訳事情—古典から近代まで—」
30	3. 3. 5	ウイベ P. カウテルト Wybe P. KUITERT (ワーゲニンゲン大学研究員) 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報—ゲオルグ・マイステルの旅—」
③①	3. 4. 9	ミコワイ・メラノビッチ Mikołaj MELANOWICZ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー Beatrice M. BODART-BAILEY (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) 「三百年前の京都—ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11	サトヤ B. ワルマ Satya B. VERMA (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9	ユルゲン・ベルント Jürgen BERNDT (フンボルト大学教授・日文研客員教授) 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」
③⑤	3. 9.10	ドナルド M. シーキンス Donald M. SEEKINS (琉球大学助教授) 「忘れられたアジアの片隅—50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8	WANG Xiao Ping 王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) 「日本語の起源 —日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る—」

③⑧	3.12.10 (1991)	HONG YoonSik 洪 潤植 (東国大学校教授) 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウイトリ・ウイシユワナタン Savitri VISHWANATHAN (デリー大学教授・日文研客員教授) 「インドは日本から遠い国か?—第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷—」
40	4. 3.10	ジャン＝ジャック・オリガス Jean-Jacques ORIGAS (フランス国立東洋言語文化研究所教授) 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14	リブシェ・ボハフモコヴァ Libuše BOHAČKOVÁ (プラハ国立博物館日本美術元キュレーター・日文研客員教授) 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12	ポール・マッカーシー Paul McCARTHY (駿河台大学教授) 「谷崎文学の『読み』と翻訳: アメリカにおける 最近の傾向」
43	4. 6. 9	G. カメロン・ハーストⅢ G. Cameron HURST Ⅲ (ニューヨーク市立大学リーマン広島 校学長・カンザス大学東アジア研究所長) 「兵法から武芸へ—徳川時代における武芸の発達—」
44	4. 7.14	Yoshio SUGIMOTO 杉本 良夫 (ラトロープ大学教授) 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8	WANG Yong 王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研客員助教授) 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13	LEE Young Gu 李 榮九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10	ウィリアム D. ジョンストン William D. JOHNSTON (ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本疾病史考—『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8	マノジュ L. シュレスト Manoj L. SHRESTHA (甲南大学経営学部講師) 「アジアにおける日系企業の戦略転換 —技術移転をめぐる—」

④9	5. 1.12 (1993)	PARK Jung-Wei 朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9	マーティン・コルカット Martin COLLCUTT (プリンストン大学教授・日文研客員教授) 「伝説と歴史の間—北條政子と宗教」
⑤1	5. 3. 9	Yoshiaki SHIMIZU 清水 義明 (プリンストン大学マーカンド荣誉教授) 「チャールズ L. フリアー (1854～1919) とフリアー美術館 —米国の日本美術コレクションの一例として—」
⑤2	5. 4.13	KIM Choon Mie 金 春美 (高麗大学校教授・日文研来訪研究員) 「日本近代知識人の思想と実践—有島武郎の場合—」
53	5. 5.11	タキエ・スギヤマ・リブラ Takie SUGIYAMA LEBRA (ハワイ大学教授) 「皇太子妃選択の象徴性 —旧身分文化との関連を中心として—」
54	5. 6. 8	H. W. KANG 姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 —科举制度をめぐる—」
⑤5	5. 7.13	ツベタナ・クリステワ Tzvetana KRISTEVA (ソフィア大学教授・日文研客員教授) 「涙の語り—平安朝文学の特質—」
⑤6	5. 9.14	KIM Yong-Woon 金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) 「和算と韓算を通して見た日韓文化比較」
⑤7	5.10.12	オロフ G. リディン Olof G. LIDIN (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9	マヤ・ミルシンスキー Maja MILCINSKI (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) 「無常観の東西比較」
59	5.12.14	ウィリー・ヴァンドゥワラ Willy VANDEWALLE (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) 「日本・ベルギー文化交流史—南蛮美術から洋学まで—」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン J. Martin HOLMAN (ミシガン州立大学連合日本センター所長) 「自然と偽作—井上靖文学における『陰謀』—」

61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ Maya GERASIMOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) 「外から見た日本文化と日本文学 —俳句の可能性を中心に—」
62	6. 3. 8	オギュスタン・ベルク Augustin BERQUE (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12	リチャード・トランス Richard TORRANCE (オハイオ州立大学助教授) 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10	シルバーノ・D・マヒウ Sylvano D. MAHIWO (フィリピン大学アジアセンター準教授) 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14	LIU Jian Hui 劉 建輝 (南開大学副教授・日文研客員助教授) 「『魔都』体験—文学における日本人と上海」
66	6. 7.12	チャールズ・J・クイン Charles J. QUINN (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) 「私の日本語発見—王朝文を中心に—」
67	6. 9.13	フランソワ・マセ François MACE (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) 「幻の行列—秀吉の葬送儀礼—」
⑥⑧	6.11.15	JIA Hui-xuan 賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) 「中日比較食文化論—健康的飲食法の研究—」
69	6.12.20	PENG Fei 彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) 「日本語の表現からみた—異文化摩擦のメカニズム—」
⑦⑦	7. 1.10 (1995)	ミハイル・V・ウスペンスキー Michail V. USPENSKY (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) 「根付—ロシア・エルミタージュ美術館のコレクション を中心に—」
⑦①	7. 2.14	YAN Shao Dang 嚴 紹盪 (北京大学教授・日文研客員教授) 「記紀神話における二神創世の形態—東アジア文化とのか かわり—」

⑦②	7. 3.14 (1995)	WANG Jiahua 王 家驊 (南開大学教授・日文研客員教授) 「洪沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦③	7. 4.11	アリソン・ト キ タ Alison TOKITA (モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) 「日本伝統音楽における語り物の系譜—旋律型を中心に—」
⑦④	7. 5. 9	リュドミーラ・エル マ コーワ Lioudmila ERMAKOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) 「和歌の起源—神話と歴史—」
75	7. 6. 6	パトリシア・フィスター Patricia FISTER (日文研客員助教授) 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25	CHOI Kil-Sung 崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦⑦	7. 9.26	SU Dechang 蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) 「日中の敬語表現」
⑦⑧	7.10.17	LI Jun Yang 李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) 「雷神思想の源流と展開—日・中比較文化考—」
79	7.11.28	ウィリアム・サ モ ニ デ ス William SAMONIDES (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧①	7.12.19	タチヤーナ・ソ コ ロ ワ = デ リ ュ シ ナ Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA (翻訳家・日文研来訪研究員) 「俳句の国際性—西欧の俳句についての一考察—」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク John CLARK (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」
⑧②	8. 2.13	ジェイ・ルービン Jay RUBIN (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12	イザベル・シャリエ Isabelle CHARRIER (神戸大学国際文化学部外国人教師) 「日本近代美術史の成立—近代批評における新語—」

⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン Leith MORTON (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28	マーク・コウディ・ポールトン Mark Cody POULTON (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11	フランシスコ・ハビエル・タブレロ Francisco Javier TABLERO (慶應義塾大学訪問講師) 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30	シルヴァン・グニヤール Sylvain GUIGNARD (大阪学院大学助教授) 「筑前琵琶—文化を語る楽器」
88	8. 9.10	ハーバート E. プルチョウ Herbert E. PLUTSCHOW (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1	WANG Xiu-wen 王 秀文 (東北民族学院助教授・日文研客員助教授) 「シャクシ・女・魂 —日本におけるシャクシにまつわる民間信仰—」
90	8.11.26	WANG Bao Ping 王 宝平 (杭州大学日本文化研究所副所長・日文研客員助教授) 「明治期に来日した中国人の外交官たちと日本」
⑨1	8.12.17	CHEN Shen Bao 陳 生保 (上海外国語大学教授・日文研客員教授) 「中国語の中の日本語」
⑨2	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシエリャコフ Alexander N. MESHCHERYAKOV (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪研究員) 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18	KWIK Young-Cheol 郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) 「言語から見た日本」
⑨4	9. 3.18	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL (スペイン・マドリード国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) 「弁当と日本文化」

95	9. 4.15 (1997)	ミケーレ F. マルラ Michele F. MARRA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校準教授・日文研客員助教授) 「弱き思惟—解釈学の未来を見ながら」
96	9. 5.13	デニス・ヒロタ Dennis HIROTA (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレー仏教研究所準教授) 「日本浄土思想と言葉 —なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
97	9. 6.10	ヤン・シヨクラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 「近世商人の世界—三井高房『町人考見録』を中心に—」
98	9. 7. 8	Kinya TSURUTA 鶴田 欣也 (プリティッシュュコロンビア大学教授・日文研客員教授) 「向こう側の文学—近代からの再生—」
99	9. 9. 9	ポーリン・ケント Pauline KENT (龍谷大学助教授) 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14	セオドア・ウィリアム・グーゼン Theodore William GOOSSEN (ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
101	9.11.11	KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シヨクラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授) Kinya TSURUTA 鶴田 欣也 (プリティッシュュコロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
102	9.12. 9	ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授) 「猿から尼まで—狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授) 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

⑩④	10. 2.10 (1998)	GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授) 「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」
105	10. 3. 3	シュテファン・カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授) 「和魂漢才、和魂洋才——語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7	スミエ・A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19	リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) 「映画と文学の間に——金井美恵子の小説における映画的身体」
⑩⑧	10. 6. 9	Hiroshi SIMAZAKI 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) 「化粧の文化地理」
⑩⑨	10. 7.14	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか ——詩的イメージとしての典故——」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪①	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』——安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪②	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化——芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪④	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて——宇宙論からのアプローチ」

115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑪⑥	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪⑦	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑪⑧	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑪⑩	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑪⑪	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noel A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑪⑫	11.11.16	ヴラディ斯拉フ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアド Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑪⑬	11.12.14	X. Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」

⑫⑤	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガ デ レ ワ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑥	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ マリア・ト レ ニ ン ハ ル ト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑧	12. 4.11	ペ ッ カ・コ ル ホ ネ ン Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」
129	12. 5. 9	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
⑫⑩	12. 6.13	ケ ネ ス・リ チャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リ ュ ド ミ ラ・ホ ロ ド ヴ ィ ッ チ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑫⑫	12. 9.12	マー ク・メ リ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リ チャード・ル ビ ン ジ ャ ー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
⑫⑭	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」

⑬③⑥	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世の経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
⑬③⑧	13. 4.10	Li Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑬③⑨	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」
⑬④①	13. 6.12	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑬④②	13. 9.18	ジョナサン M. オーガスティン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における「近親婚」と中国の「同姓不婚」との比較」
145	13.12.11	チグサキムラステイブン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑬④③	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」

147	14. 2.12	マシミリアーノ ト マ シ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 恵卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マツシュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」
150	14. 5.14 (2002)	LEE Kwang Joon 李 光潯 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」
⑮	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボ ロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
153	14. 9.10	YEE Milim 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス リュッター マン Markus RUETTERMANN (国際日本文化研究センター 外国人研究員) 「伝授かあ伝統へ—中・近世日本における「啓蒙」の一面について」
155	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・国際日本文化研究センター 外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン バーンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学 準教授・国際日本文化研究センター 外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>

発行日 2003年1月31日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075)335-2048
ホームページ：<http://www.nichibun.ac.jp>

© 2003 国際日本文化研究センター

■ 日時

2002年 1 月15日 (火)

午後 2 時～ 4 時

■ 会場

国際交流基金 京都支部

